クシャミの俗信

岡田充博

一

クシャミが出たとき「誰かが噂をしている」というのは、今も私達の日常のなかに生きている俗信であるが、その由来となると極めて古いものがある。小論では、中国を中心として関連する資料を通覧し、併せてヨーロッパやインド、さらには日本についても一瞥してみたいと思う。

二

中国においては、クシャミの俗信は最古の詩集『詩経』（前九～七世紀頃）にまで遡り、しばしば学者や文人の著述にも取り上げられている。その邶風「終風」の詩に、次のような一節がある。

終に風ふき且つ曀る（終風且曀）　風が吹き日がくもる
日はれずして有曀る（不日有曀）　晴れもせずくもるばかり
寤めて言に寐ねられず（寤言不寐）　めざめてはねつかれもせず
願うて言に則ち嚏す（願言則嚏）　おもいわびくさめをはなつ[1]

ここに詠われたクシャミが意味するところは、詩句からは明らかでないけれども、後漢の鄭玄（一二七～二〇〇）は箋注で次のように解説する。

我　其れ憂悼して寐ぬる能はず、汝　我を思ひて心是の如ければ、我は則ち嚏するなり。今　俗人の嚏して「人　我を道ふ」と云ふは、此れ古の遺語なり。[2]

つまり、二世紀の後漢の人々は、クシャミをすると現在の私達と同じように、「誰かが私の噂をしている」と言っていたのであり、それはこの『詩経』の詩が詠われた時代において、すでにそうだった、

というわけである。

この俗信は、唐代では幾分形を変えて伝わってもいたようで、李匡乂『資暇集』は巻下「噦呃」に次のように言う。

今の人はクシャミをするたびに、必ず自ら求めるところを祈願して然々という。調べてみると、『詩経』邶風の「終風」篇の注に「願は思と同義、言は我と同義である。おそらく、人が自分のことを思うと、自分はそれにクシャミをするのであろう」という。鄭玄はさらに「古の遺語なり」と説き、「クシャミをするたびに『人が私のことを噂している』と言うのは、他人が自分のことを噂するとクシャミが出ると考えるからだ」とする。これは正に「願言」の意を得たもので、「呪願」の「願」ではなく、「語言」の「言」でもない。今の人が自ら祈り願うのは、『詩経』の句の誤解によるものである。(3)

『詩経』の原義に遡っての議論もさることながら、李匡乂に『詩経』の誤解によるものとされている、当時の習俗が興味深い。唐代の人々は、クシャミをすると願い事を唱えていたのである。

時代を降って宋代になると、詩作品にもクシャミの俗信が歌い込まれている。北宋・梅堯臣『宛陵集』巻一三の「願ひて噦す 上辛の祈穀に献官為り（願噦 上辛祈穀爲獻官）」詩に、「我は今 泰壇の下に斎寝し、侘傺しく願ひ噦す 朱顔の妻を（我今齋寢泰壇下、侘傺願噦朱顔妻）」（『宛陵集』巻一三）の句が、蘇軾の「元日 丹陽に過り 明日の立春に魯元翰に寄す（元日過丹陽明日立春寄魯元翰）」詩には、「白髪 蒼顔 誰か肯へて記さん、暁来 頻りに噦するは何人の為ならん（白髪蒼顔誰肯記、曉來頻噦爲何人）」（『東坡全集』巻五、『東坡詩集注』巻二二）の句が見える。また黄庭堅の「薛楽道 南陽自り来りて都に入る 留宿会飲し詩を作りて餞行す（薛樂道自南陽來入都留宿會飲作詩餞行）」詩にも、「觴を挙げて遙かに我に酌めば、噦を発して頌さるを知らん（舉觴遥酌我、發噦知見頌）」（『山谷集』外集巻一）とある。(4)

クシャミの俗信に関する宋代の考証としては、洪邁『容斎随筆』巻四に「噴嚏」があり、「終風」と鄭箋を引いて次のように言う。

今の人はクシャミが止まらないと、必ずツバを吐き呪いをして「誰かが私の噂をしている」と言い、婦人が最も甚だしい。「終風」の詩を調べてみると、「寤めて言に寐ねられず、願ひて言に則ち嚏す」とあり、鄭玄の箋注に「…（略）…」という。それでこの風習が古くから有ることが分かるのである。(5)

このほか宋・闕名（『説郛』は宋の邢凱の撰とする）の『坦斎通編』には、「人の日常の談話には、基づくところが有ることが多い。クシャミなどは、『詩経』「終風」の「願ひて言に則ち嚏す」による」とある。(6)

また宋・馬永卿『嬾真子録』巻三にもこの俗信について述べた一文があり、「終風」の詩を引いた後、『漢書』芸文志に「嚏耳鳴雑占十六巻」とあること(7)を指摘して、次のように言う。「そうであればクシャミや耳鳴りにも皆な吉凶があったのだが、今はこの術は滅んでしまっている(8)」。しかし、漢代の占いとの関連は不明であるものの、実は宋代にもクシャミ占いは行われていた。陳元靚『（新編群書類要）事林広記』巻九の巻五・讖候玄機には、『占噴嚏経』なる書からの次のような引用がある。

〔クシャミが出るのが〕子の日であれば酒食のもてなしがあり、丑

の日であれば専ら憂いや疑い事ばかり。寅の日であれば外の世事があり、卯の日であれば大吉。辰の日であれば婚礼の集まりに吉、巳の日であれば言い争いに終始する。午の日であれば喜び事に吉、未の日であれば事もなく尋常。申の日であればただ平々凡々、酉の日であれば来客がある。戌の日であれば女性に思われ、亥の日であれば思っている人がいる。(9)

他にも元・陶宗儀『説郛』巻一〇九下には、宋・俞誨『百怪断経』の「噩噴占」として次のような一文が載る。

子の時なら、酒食を主とする。丑の時なら、女の思いを主とする。寅の時なら、女の相い和するを主とする。卯の時なら、財の喜びを主とする。辰の時なら、酒食を主とする。巳の時なら、人が財をもたらすを主とする。午の時なら、客人の来訪を主とする。未の時なら、酒食を主とする。申の時なら、不利益に驚くを主とする。酉の時なら、文人の来たり求めるを主とする。戌の時なら、和合を主とする。亥の時なら、吉利を主とする。(10)

先の『占噴噩経』と重なるところがあり、文章も整った形になっている。この「噩噴占」は、清・李光地等『月令輯要』巻二四・時刻令・占験の「噩噴」にも引かれており、消え去った訳ではなかったようである。

クシャミに関する学術的考証に戻ると、時代を降って明の郎瑛『七修類稿』続稿巻六・事物類「噴噩」には、次のようにある。

『詩経』に「願(おも)ひて言に則(ここ)ち噩す」という句があって、注には「汝が心の我を思へば則ち噩するなり」とある。今の人がクシャミをして「誰かが噂している」と言うのには、どうして謂れが無いことがあろうか。だから漢代に『噩耳鳴雑占』十六巻の書があり、蘇東坡に「暁来 噴噩するは何人の為ならん」の詩句があって、来歴たるや実に遠いのである。先頃、『柳氏旧聞』のクシャミの一記事を見たところ、本来の正しい意味とは言えないけれども、贅言として付け足せば、お笑い種とはなるものであった。

唐の玄宗は弟達を愛し、ある日、寧王と共に食事をしていたところ、寧王が噎せて、食べ物を玄宗皇帝の髭に噴き溢してしまった。寧王は驚き恥じ入って心安からず、玄宗もまた不機嫌になった。するとお側にいた黄幡綽が言った、「これは噎せたのではありません、『噴帝(フンティ)(噴 噩(フンティ)つまりクシャミ)』でございます」と。帝は喜んで冗談を飛ばし、「幡綽は佞臣なのか」と言った。すると黄幡綽もまた「臣は御上が臣のことを思って下さるのを知っておりますので、『願ひて言に則ち噩する』のでございます」と応えた。帝は大層喜んだ。(11)

「噴帝」の逸話を載せる『柳氏旧聞』については、『宋史』巻二〇六・芸文志・小説類に「柳氏小説舊聞六巻、柳公權撰」とあり、唐の柳公権の筆に成るものであったことが分かる。現在、『小説旧聞記』と題して『説郛』本一巻、『唐人説薈』本一巻などが伝わるが、偽書と疑われ、この話も収められていない。なおこの話は、明・徐伯齢『蟫精雋』巻九「噴噩」にも載り、出典は同じく『柳氏旧聞』となっている。

この他、『永楽大典』(明・解縉等勅命編)の巻一四一二四・四霽には

「噦」の項目があり、多くの記事を抜粋掲載する。（本稿執筆に当たって参照し、参考になった。）

また学術的な考証ではないが、明代では劉侗・于奕正『帝京景物略』が、巻二・城東内外・春場に次のような習俗の記事を載せている。

正月の元旦、五更（夜明け前）の太鼓が鳴る時刻には、仰臥せずにクシャミをし、クシャミをしたら急いで立ち上がり、衣服を着る暇もないことさえあるのだが、「仰臥してクシャミをすると病気になる」と言われている。仰臥せずに話していると、戸外に呼び声がすることがあるが、応答はしない。「呼ぶ者は、幽鬼だ」という。……[12]

清代になると、褚人穫『堅瓠集』丙集巻二に、「噴噦」と題して前掲の考証と同様な記事が見え、やはり「噴帝」の話を紹介している。重複することになるが幾分内容を異にし、参考になる言及も見られるので、煩を厭わず挙げておく。

今の人はクシャミをすると、唾を吐いて「好い人が私の噂なら何時も安楽に、悪い人が私の噂なら歯が抜けろ」と言う。「終風」の詩にいう、「寤めて言に寐ねられず、願ひて言に則ち噦す」と。蘇東坡に詩が有って、「白髪 蒼顔 誰か肯へて記さん、晩来頻りに噦するは何人の為ならん」という。『容斎随筆』もまたこんな記事を載せている、「クシャミが止まらないと、必ず唾を吐いて祈って、『私の噂をしている人がいる』と言うが、婦人が最も甚だしい。その来源たるや遙か昔にさかのぼるのである」と。聞くところによると唐の玄宗は兄弟を愛し、寧王を「兄さん」と呼び、何時も食事を共にしていた。ちょうど食べている時、寧王が噎せて、玄宗の髭に噴き溢してしまった。寧王が驚き恥じ入ったので、玄宗は彼を安心させようとした。すると黄幡綽が言った、「これは噎せたのではありません」と。玄宗が「では何なのか」と尋ねると、「これは『噴帝（噴嚏）』でございます」と答えた。玄宗は大層喜んだ、と。つまり、もともとクシャミを良い事と見なしているのである。[13]

こちらの「噴帝」の話では、玄宗の優しい人柄が専ら語られる文脈に変わり、黄幡綽の当意即妙の対応も一度だけに削られている。また蘇軾詩の「暁來」が「晩來」となっているのは、褚人穫の記憶違いであろうか。いずれにしてもこのように、クシャミの俗信は中国において長く生き続け、屡々取り上げられる話柄ともなったのである。

再び考証から離れ、清代の文献に見える資料を幾つか追加しておくと、厲鶚『遼史拾遺』巻二四「治夔離」に、次のような記事が見える。

『燕北録』に言う、北主（遼の太宗耶律徳光、在位九二六～九四七）の母后がクシャミをした時、すべての近侍の蕃漢の臣僚たちは、みな一斉に「治夔離（チキリ）！」と唱えた。漢語の「万歳」である。[14]

『燕北録』は宋の王易の撰（佚書）であり、従ってこの記事は宋代にまで遡ることになる。遼はモンゴル系契丹族の王朝。十世紀の北方遊牧民族にも、クシャミをした際に「万歳！」と唱える習俗があったことが分かる。なお、これと似たところがあって面白いのは、清の魏源『海国図志』に載り、明の艾儒略（ジュリオ・アレーニ）『職方外

紀』に遡るアビシニア、すなわちエチオピアの王と臣下達の話であるが、これは次節で取り上げることにする。

また、祁連休『中国古代民間故事類型研究』（河北教育出版社、二〇〇七年）には、「打噴嚏型故事」の項があり（下冊一一三六～七頁）、清の遊戯主人『笑林広記』巻四に載る「過橋嚏」の笑話が引かれている。

ある田舎者が都会から帰り、妻に言った、「わしは街で数え切れないほどクシャミが出たよ」と。すると妻は、「みんな私が家で、あんたのことを思ってるせいよ」と答えた。ある日、肥桶を担いで危険な橋を通るとき、また続けざまに数回クシャミが出て、あやうく足を踏み外しそうになった。そこで罵って言うには、「助平女め！　わしのことを思うにしても、どんな所にいるかを弁えてからにしろ」と。(15)

祁氏によれば、この話型は現在も江蘇・湖北・山西省などの地域に、「打噴嚏」として流布するという。クシャミの俗信は、このように今も広く生き続けているのである。

三

前節には近代以前の中国の資料や考証を取り上げてみたが、クシャミについては、現代の論考も幾つかあることを忘れてはならない。先ず中国では、インド学の大家季羨林の「説〝嚏噴〟」（『比較文学与民間文学』北京大学出版社、一九九一年／『季羨林文集　第八巻　比較文学与民間文学』江西教育出版社、一九九六年）が挙げられる。

この論考は、クシャミと人の噂の俗信についてではなく、子供がクシャミをした時、側にいた人が「長命百歳」と唱える中国北方の俗習をめぐって著された、四頁ほどの短い文章である。しかし、ドイツやイギリスにも「Gesundheit（健康）！」と唱える同様な習俗があること、由来は遠く古代インドにまで遡ること等、教示を受けるところが多い。先に触れた『海国図志』等に載るエチオピアの話も、実はこれによって知った次第である。季氏は、魏源『海国図志』巻三四・小西洋・南利未加国に所引の『職方外紀』を紹介しているが、ここはジュリオ・アレーニ『職方外紀』巻三の「亞毘心域　馬拿莫大巴者」から、直接引いておこう。

…　その人種には二種類があり、一つはリビアの東に在って、亞毘心域（アビシニア）と名付けられている。……　……もう一つはリビアの南に在って、馬拿莫大把者（マナムタピア？未詳）、と名付けられ、国土は最も広く、極めて愚かで、道理を知らない。……　……その俗は、おおよそ偶像を崇めようとしないが、それでも天地に主あることを知っている。ただ、その王をまるで神のように仰ぎ、また天地の主と見做している。およそ曇につけ晴れるにつけて旱魃水害の際には、皆で出かけて王に祈るのである。もし王が偶々クシャミをすると、朝廷を挙げて全員が声高に応諾し、さらにまた国を挙げて声高に応諾する。甚だ笑うべきことである。(16)

国王のクシャミに呼応して、臣下国民がどう叫んだかは記されていないが、季氏は「健康長寿」の類の言葉ではないかと想像している。そして王のクシャミが人々の祈願の際だったとすると、それは願いが神に聞き届けられたことを示す、シグナルでもあったのでは

ないだろうか。中国では唐代、「琵琶卜」という占いが流行し詩歌や小説に記事が残るが、琵琶を奏でて神降ろしをする巫女は、アクビのように大きく口を開き、クシャミをした後に託宣を告げている。[17] 神との交感の成立を示すクシャミという点で共通し、興味深いものがある。なお、この記事は清の南懐仁（フェルディナント・フェルビースト）『坤輿図説』巻下にも見え、「馬拿莫大把者」は「莫訥木大彼亞」と表記されている。

インド関係の資料として同論考が挙げるのは、『四分律』巻五三、『十誦律』巻三八、『根本薩婆多部律摂』巻一三、『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻一〇である。些か煩瑣になるが、それらを通覧してみることにしよう。先ず『四分律』（唐・義浄訳）には、次のような一節が見える。

その時世尊は、祇桓（祇園精舎、またその林）の中で無数の衆生に法を説いておられた。ちょうどそのときに世尊がクシャミをされたので、比丘（修行僧）たちは呪願（祈り願いをこめる）して「長寿！」と唱えた。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷（男女の修行僧、男女の在家仏教信者）たちもまた「長寿！」と唱え、かくて大勢が騒ぎ立てる事態になった。仏陀は「そのようにすべきではない」と言われた。ちょうど居士（在家の男子の仏教信者）のクシャミをする者がいたが、比丘たちは畏れ慎んで敢えて長寿とは唱えなかった。居士たちは皆それを譏り嫌って言った、「私たちがクシャミをしても、比丘たちは長壽と呪願しません」と。比丘たちが仏陀に申し上げると、仏陀は、「長寿と呪願することを許す」と言われた。その時居士たちは比丘に拝礼したが、比丘は畏れ慎んで敢えて長寿とは唱えなかった。世尊が呪願を許されないと思ったのである。居士たちは皆それを嫌って言った、「私たちは比丘に拝礼しましたが、比丘は私たちの長寿を呪願しませんでした」と。比丘たちが仏陀に申し上げると、仏陀は、「長寿と呪願することを許す」と言われた。[18]

釈尊のクシャミを聞いて、説法を聴く人々が我先に「長寿！」と唱えているのは、それがすでに慣習となっていたことを示している。従ってクシャミの呪言の起源は、これよりずっと古いことになる。また先の『燕北録』の呪言「治夔離（万歳、万年までも）」とも重なって面白い。ただ、釈尊がそれを咎め、後で許した理由がはっきりしないが、彼がこの言葉に少なからぬ抵抗を感じていたことは、次の『十誦律』（後秦・弗若多羅共羅什）の一節からも読み取れる。

仏陀は劬摩国（未詳。「劬摩」あるいは「蒭摩」は、麻、亜麻布のこと。これを特産とする国であろうか。）で大比丘僧に五陰（五蘊、あらゆる存在の五つの構成要素）の法、いわゆる色・受・想・行・識について説いておられた。その時仏陀はクシャミをされた。五百人の比丘は、同時に声をそろえて「老寿！」と唱えた。すると仏陀は比丘たちに「お前達が『老寿』と言ったことによって、老寿を得ることができるであろうか」と問われた。「そんなことはありません、世尊よ」と答えると、仏陀は言われた、「今より老寿と称してはならぬ。老寿と称した者は小罪を犯したことになろう」と。[19]

ただし、「長寿」「老寿」が全くの禁句だった訳ではなく、『四分律』でもそうであったように、場合によってはこの呪言が認められる。

『根本薩婆多部律摂』（唐・義浄訳）の一節は、その条件が語られている例である。

年長者がクシャミをした時、年少者は「畔睇（敬礼）！」と言う。年少者がもしクシャミをしたら、年長者は「阿路祇（病無し）！」と言う。もし言わなければ、ともに小罪を犯したことになる。しかし「願わくば長命を得ん」と言うべきではない。世俗の老母および莫訶羅（老衰者）の長寿を願う者が言う場合は、差し支えない。[20]

また、『毘奈耶雑事』（唐・義浄訳）には次のようにある。

後のそれとは異なる時に仏陀は大衆のために法の枢要を宣べ説いておられた。その時、老いた苾芻（出家修行する男性の僧侶、比丘）が衆の外坐にいた。出家前に連れ添った妻が不意にやって来て夫のクシャミを聞いたが、苾芻たちのうちには一人も「長寿」の願言をする者がいなかった。妻はこの様子を見て、我慢出来ない気持になり、左手で土を握り、苾芻の頭をめぐらせて外に向かって棄て、長寿を呪願した。その時、苾芻たちは共にその事を傍観していた。妻は進み出て腕を捉えて口汚く罵り、告げて言った、「聖者よ、仁（あなた）は今どうして怨讐のなかで出家修行なさるのでしょうか。この逝多林（祇陀太子の林苑。逝多林給孤独園、祇樹給孤独園などと漢訳される。ここに祇園精舎が建てられた）には常に五百の青い衣の薬叉（夜叉）が居りますので、私から呪願して夫を長寿ならしめましょう。もしそうでなければ、きっと薬叉に精気を吸い取られてしまいます。こんなところに住んではいられません、家に帰りましょう」と。そして即座に夫を引いて一緒に帰ってしまった。……[21]

季氏はこの話から、クシャミに対して発せられる「長寿」の呪言が、本来は夜叉に精気を吸い取られないための魔除けの行為であったことを指摘している。つまり古代インドにおいてはクシャミは凶兆とされており、吉凶について明確でない、あるいは吉凶両様に解釈される中国の場合とは、様相を異にしているのである。

漢訳仏典中に見えるクシャミの話は、さらに拾うことができるが、先ずはこの辺に留めて西欧に眼を転じよう。

同論考はまた、饒宗頤「居延簡術数耳鳴目瞤解」（『選堂集林・史林』上冊、中華書局香港分局、一九八二年）の指摘を末尾に引き、ホメロス『オデュッセイア』第十七歌に、クシャミを吉兆とする場面があると付け加えている。そこで早速当たってみると、訪れる求婚者達を拒絶しつつ、夫オデュッセウスの帰還を待つペネロペイアが、息子テレマコスのクシャミに喜ぶ場面がある。松原千秋訳によって引用する。

……賢明な妃ペネロペイアがいうには、

「……もしオデュッセウスが国へ帰って来て下さったら、直ぐにも倅と力を合せて、この者たちの乱暴を懲らしめて下さるであろうに。」

こういったとたん、テレマコスが大きなくしゃみをし、部屋全体に凄まじく鳴り響いた。ペネロペイアは声を出して笑い、直ぐエウマイオスに翼ある言葉をかけていうには、

「さあ行ってあの他国の男を、こうしているわたしの前へ呼んで来ておくれ。いま倅がわたしのいったことの総てに、幸先よくくしゃみをしたのをそなたも見たであろう。されば、求婚

者全員に死は必ずや訪れ、一人として死の運命を免れることはできまい。……」[22]

ここから古代ギリシアにおいては、クシャミが吉兆とされたことが分かる。なお、クシャミへの呪言の風習も世界的にみられ、その科白も様々なようである。アンティ・アールネ、スティス・トンプソンやハンス・イェルク・ウターの昔話話型分類 1351A の「God heip You（神の御加護を）!」は、ヨーロッパを中心に広汎に分布する話であるが、このタイトルは夫のクシャミに対して妻が発した言葉によっている。[23]

こうしてみると、たかがクシャミとはいえ、研究対象としては世界的なスケールを持ってくることになり、疎かにはできない。ただ、私の乏しい知識ではこれ以上の論の展開は難しい。最後に日本人の考証、研究を紹介して小文を終えることにしたい。

四

日本におけるクシャミについての考証には、喜多村筠庭（信節）『嬉遊笑覧』（天保一、一八三〇年刊）の巻八・方術に「嚔（はなひる）の頌文（じゅもん）」がある。[24]

ここで彼は、漢籍では『詩経』『嬾真子録』『帝京景物略』、漢訳仏典では『四分律』を引き、さらに日本の古典からは、『万葉集』『古今集』『袖中抄』『徒然草』など、多くの関連資料を挙げて論じている。後に南方熊楠が、この考証を取り入れながら英文の「Sneezing Sperstition（くしゃみにまつわる迷信）」（一九二七年）を書き残しているので、その邦訳を節録して、内容の骨子と南方の補足を示しておくことにする。[25]

『嬉遊笑覧』（一八〇〇年頃に執筆、……）で喜多村信節は、日本と中国では、古くからくしゃみは誰かが愛情をこめて思い起こしてくれる証拠とされてきたが、インドでは仏陀の時代からすでに、よくない兆候をしめすものとされたと論じている。のちに中国では、くしゃみは幸先のよいものとも、不吉なものともみなされるようになった。……

さらに喜多村は、九〇五年編纂の歌集から一篇の歌を引き、当時の日本では、旅に出ようとしたときに、たとえ隣家からであっても、くしゃみをするのが聞こえたら、出発を延期したことを示している。このことからは、トンガではくしゃみが遠征に際しての最悪の予兆とされていることが思い出される（マリナー『トンガ諸島原住民の報告』一八二七年］、タイラー『原始文化』に引用、アメリカ版三版、［一八八八年］、一巻九九頁）。また台湾のさまざまな部族のあいだでは、狩りなどに出かけていて誰かがくしゃみをすると、しばらく立ち止まったり、向かう方角を変えたり、あるいは狩りそのものを取りやめてしまうことすらあるという（伊能嘉矩（かのり）［「台湾土蕃（どばん）の噴嚔（ふんてい）の迷信」］『東京人類学会雑誌』二七〇号、一九〇八年九月、四六五頁）。

文中「九〇五年編纂の歌集」とあるのは『古今和歌集』を指し、巻一九・雑詠歌の「いでてゆかむ人をとどめむよしなきに隣の方に鼻もひぬかな」をいう。南方翁の文章は例によって博覧強記で読者を惹きつける。序でに続く文章も節録しておこう。

清少納言（一〇〇〇年頃）は機知に富んだ文章で知られた官女

だが、彼女によれば、当時の日本では、元日早朝のくしゃみは長寿を確約するものと信じられていた。これは前述の中国での見解とは正反対のものである。日本では、一四世紀以降に、自分が乳を与えている子どもがくしゃみをしたら、乳母はかならず「くさめ」と言わなければならないという習慣ができた。「鼻の穴を閉じるため」とされる。「くさめ」の語は、「休息万命（永遠に安らかに）」という呪文の転訛らしい。……今日でも、くしゃみのあとに、おきまりの「徳万歳（万年生きよ）」と唱える古風なひとたちが、日本からすっかりいなくなってしまったわけではない。

「元日早朝のくしゃみは長寿を確約する」というのは、『枕草子』第一七八段の「したりがほなる物」の記述を指す（岩波新日本古典文学大系本による。一七七段、一八三段とする訳書もある）。「前述の中国での見解」は、『帝京景物略』の元旦の記事。「日本では、十四世紀以降に…」とあるのは、『徒然草』第四七段の「くさめくさめ」と唱えながら歩く老尼の話に基づく。また「鼻の穴を閉じる」のは、訳注によれば、鼻の穴から魂が抜け出てしまうと信じられていたからで、抜け出ないようにする意味を持つ、とのことである。

さらに新しい論考としては、専論ではないものの、山内昶『ものの け Ⅰ』（法政大学出版局・ものと人間の文化史122-Ⅰ、二〇〇四年）が詳しく、日本を中心に東西に渉る文献や習俗を紹介している（第一章第二節「二　ケとは何か」の「口はタマの出入り口」、六八～七二頁）。同書によれば、口は古代より魂の出入り口と考えられていた。クシャミは日本では古く「鼻ひ（り）」と言い、鼻ひると魂が飛びだし若死にをすると信じられ、それを防ぐ呪文が「くしゃみ」という言葉であった。「くしゃみ」は、「休息万命」「休息命」[26]の崩れた形で、鼻ひりが止まって、命が万年もあらんことを願う呪文の意味を持つ。

お釈迦様の戒めにもかかわらず、「長寿」「老寿」系統の呪言は、世俗では形を変えて絶えることが無かったようである。

注

（1）訓読および訳文は、白川静訳注『詩経国風』（東洋文庫・平凡社、一九九〇年）によった（一三一頁）。

（2）一九五五年に芸文印書館より刊行の『十三経注疏』（嘉慶二十年南昌府学開雕本影印）によれば、原文は次の通り。

我其憂悼而不能寐、汝思我心如是、我則嚏也。今俗人嚏云、人道我、此古之遺語也。

（3）四庫全書本、および陶敏主編『全唐五代筆記　第三冊』三秦出版社、二〇一二年によれば、原文は次の通り。「嚏」は本来、ついばむ、するの意味であるが、ここでは「嚏」の意味で用いられている。後の注18～21に示す『大蔵経』の原文も、「嚏」字によっている。

今人每嚏、必自祝所祈云云。案邶終風篇注、願猶思也、言猶我也。蓋他人思我、我則嚏之也。鄭又稱古遺語、每嚏云人道我、以爲他人說我、我則嚏。此正得其願言者、非咒願之願、非語言之言。今則自祝、乃由誤解詩句爾。

（4）梅・蘇・黄詩は、いずれも四庫全書本による。

（5）『容斎随筆』歴代資料筆記叢刊・唐宋史料筆記・中華書局、二〇〇五年により、鄭玄の箋注は省略した。原文は次の通り。

今人嚏噦不止者、必嘿唾祝云、有人説我、婦人尤甚。予按終風詩、

寤言不寐、願言則噦。鄭氏箋云、…（略）…　乃知此風自古以來有之。

（6）四庫全書本によれば、原文は次の通り。

人之常談、多有所本。如噴噦、此詩終風願言則噦。

（7）『漢書』巻三〇・芸文志・数術略・雑占十八家に、「噦耳鳴雑占十六巻」とある。また『隋書』巻三四・経籍志・五行類の「雑占夢書一巻」の夾注には、南朝梁代の書として「噦書一巻」の名が挙げられており、クシャミと占いの深い結びつきが窺われる。

（8）四庫全書本および『宋元筆記小説大観　第三冊』上海古籍出版社、二〇〇一年によれば、原文は次の通り。

然則噦耳鳴皆有吉凶、今則此術亡矣。

（9）長澤規矩也編『和刻本類書集成　第一輯』汲古書院、一九七六年によれば、原文は次の通り。

子日有酒食、丑日主憂疑。寅日有外事、卯日主大吉。辰日婚會吉、巳日主口舌。午日喜事吉、未日是尋常。申日只平平、酉日有客至。戌日女思念、亥日有人思。

蛇足であるが同書巻八の巻五・備急単方「兒頭入臼」には、「児頭　鉄臼に入らば、噴嚔を以てす。薬　鼻中に着くれば、即ち出づ（兒頭入鐵臼、以噴嚔。藥着鼻中、即出）」とある。子供が鉄臼の中に頭を入れて抜けなくなってしまったら、クシャミをさせるとよいとのことである。本当だろうか？

（10）四庫全書本によれば、原文は次の通り。

子時、主酒食。丑時、主女思。寅時、主女相和。卯時、主財喜。辰時、主酒食。巳時、主人來財。午時、主有客來。未時、主酒食。申時、主驚不利。酉時、主文人來求。戌時、主和合。亥時、主吉利。

（11）『七修類稿』世紀出版集団・上海書店、二〇〇一年によれば、原文は次の通り。

詩曰、願言則嚔、註云、汝心思我則嚔也。今人嚔而云有人説己、豈無謂哉。故漢有嚔耳鳴雑占十六卷、東坡有曉來噴嚔爲何人之詩、來亦遠矣。昨見柳氏舊聞一嚔事、雖非正義、贅之亦可發笑也。唐玄宗友愛諸昆弟、一日同寧王飲食、寧王挫喉、噴食上髭。王驚慚不安、玄宗亦不懌。黄幡綽在側、曰、不是挫喉、乃噴帝耳。帝遂悦、因戲曰、幡綽佞臣乎。黄亦曰、臣知上思臣、臣乃願言則嚔耳。帝又大悦。

（12）『帝京景物略』北京古籍出版社、一九八〇年によれば、原文は次の通り。

正月元旦、五鼓時、不臥而嚔、嚔則急起、或不及衣、曰臥嚔者病也。不臥而語言、或戸外呼、則不應。曰呼者、鬼也。……

なお、清・于敏中等編『日下旧聞考』巻一四七・風俗にも、『帝京景物略』からとして同文の引用がある。

（13）『堅瓠集　（一）』歴代筆記小説大観・上海古籍出版社、二〇一二年により、簡体字を改めて示せば、原文は次の通り。

今人噴嚔、唾曰、好人説我常安樂、惡人説我齒牙落。終風之詩曰、寤言不寐、願言則嚔。東坡有詩云、白髮蒼顔誰肯記、晚來頻嚔爲何人。隨筆亦載、噴嚔不止者、必噀唾祝云、有人説我、婦人尤甚。其來已久。聞唐玄宗友愛昆季、呼寧王爲大哥、每與同食。食次、寧王錯喉、噴上髭。王驚慚、上顧欲安之。黄幡綽曰、不是喉錯。上曰、何也。對曰、是噴帝。上大悦。則固以噴嚔爲佳事矣。

（14）四庫全書本によれば、原文は次の通り。

燕北録曰、北主太后嚔噴時、但是近位番漢臣僚等、并齊道治夔離。漢語萬歲也。

（15）同書により、簡体字を改めて示せば、原文は次の通り。

一鄉人自城中歸、謂其妻曰、「我在城里打了無数噴嚔」。妻曰、「皆我

在家想你之故」。他日挑糞過危橋、復連打数噦、幾乎失足、乃罵曰、「騷花娘、就是思量我、也須看甚麽所在」。

ただし原書は未見。王利器輯録『歴代笑話集』（上海古籍出版社、一九八一年）の『笑林広記』四十九則には、選録されていない。

（16）四庫全書本によれば、原文は次の通り。

…… 其人有兩種、一在利未亞之東者、名亞毘心域。…… ……一種在利未亞之南、名馬拿莫大把者、國土最多、皆極愚蠢、不識理義。…… ……其俗大畧不崇魔像、亦知天地有主。但視其王若神靈、亦以為天地之主。凡陰晴旱澇、皆往祈之。王若偶一噴涕、舉朝皆高聲應諾、又舉國皆高聲應諾、大可笑也。

（17）例えば、『太平広記』巻三四一・鬼二六の「韋浦」（出典は薛漁思『河東記』）には、幽鬼のせいで引きつけをおこした幼児を巫女が神降ろしで治療する場面があり、「二娘は巫者なり。至れば則ち琵琶を以て神を迎へ、欠噦すること良や久しくして曰く…（二娘巫者也。至則以琵琶迎神、欠噦良久曰…）」という。「欠噦」は、「欠伸（アクビあるいは大きく口を開ける）」「噴嚏（クシャミ）」すること。また温庭筠の「燒歌」詩は、焼畑農業の賽神の祭りを詠った作品で、「仰面して呻（うた）ひ復た噦し、鴉娘は豊歳を呪（いの）る（仰面呻一作呼復噦、鴉娘一作雅嬢咒豐歲）」の句が見える（『温飛卿詩集箋注』巻三、『全唐詩』巻五七七）。「鴉娘」は黒衣の巫女で、琵琶の演奏の描写は無いが、彼女はやはりクシャミをしている。なお、「琵琶卜」については、拙論「琵琶占い」（『横浜国大国語研究』第三七号、二〇一九年三月）を参照されたい。

（18）『大正新脩大蔵経』第二二冊・律部一・九六〇頁中段。原文は次の通り。

爾時世尊、在祇桓中與無數衆説法。時世尊嚏、諸比丘呪願言長壽。諸比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷亦言長壽。大衆遂便鬧亂。佛言、不應爾。時有居士嚏、諸比丘畏愼不敢言長壽。居士皆譏嫌言、我等嚏、諸比丘不呪願長壽。諸比丘白佛。佛言、聽呪願長壽。時諸居士禮比丘、比丘畏愼不敢言長壽。世尊不聽我呪願。諸居士皆嫌言、我等禮比丘、比丘不呪願我等長壽。諸比丘白佛。佛言、聽呪願長壽。

（19）『大正新脩大蔵経』第二三冊・律部二・二七四頁中段。原文は次の通り。

佛在芻摩國與大比丘僧説五陰法、所謂色受想行識。爾時佛嚏遍。五百比丘一時同聲言老壽。佛語諸比丘、以汝等言老壽故、便得老壽耶。不也世尊。佛言、從今不得稱老壽。稱老壽者得突吉羅。

（20）『大正新脩大蔵経』第二四冊・律部三・五九九頁中段。原文は次の通り。

大者嚏時、小云畔睇。小者若嚏、大云阿路祇。若不言者、倶得惡作。然不應云願得長命。若俗老母及莫訶羅、願長壽者道時無犯。

（21）『大正新脩大蔵経』第二四冊・律部三、二四九頁中～下段。原文は次の通り。

後於異時、佛爲大衆宣説法要。時老苾芻在衆外坐。舊妻忽來、聞夫嚏噴。諸苾芻等無有一人願言長壽。其妻見已、心生不忍、便以左手握土、繞苾芻頭向外而棄、呪願長壽。時諸苾芻共觀其事。妻前捉臂、惡口罵詈、告言、聖子、仁今何故於怨讎内而爲出家。此逝多林常有五百青衣藥叉、由我呪願令汝長壽。若不爾者、定被藥叉吸其精氣。不應住此、宜可歸家。卽牽共去。……

なお「其妻見已、心生不忍」の箇所は、原文では「其妻見。已心生不忍」と句読を切っているが、季氏の引用の句読に従った。また「告言、聖子」の箇所も、原文は「告言聖子」と続け、「仁今」以下を妻の言葉とするが、これも季氏の引用に従った。

（22）松原千秋訳『オデュッセイア』岩波文庫、一九九四年、下冊一四五頁。この一節のクシャミについては、「くしゃみを吉兆とするのは、古来各

国にその例が見られる。クセノポン『アナバシス』巻三、二、九などもその一である。」という松原氏の注記がある（三三六頁）。

(23) アールネ、トンプソンの『昔話の話型』の改訂増補版である、ハンス・イェルク・ウターの著書は、近年左記の全訳が出版されて利用に便利となった。該当の話型については、六四八～九頁参照。

小澤俊夫監修・加藤耕義訳『国際昔話話型カタログ　分類と文献目録』（小澤昔ばなし研究所、二〇一六年）

なお英語では、(God) Bless you ! が一般的な言い方のようである。

(24) 『嬉遊笑覧』は、長谷川強ほか校訂の岩波文庫本第四冊、二〇〇五年により、吉川弘文館の日本随筆大成本別巻第三冊、一九九六年新装版を参照した。

(25) 飯倉照平監修・松井竜五ほか訳『南方熊楠英文論考　「ノーツアンドクエリーズ」誌篇』集英社、二〇一四年、二四二～四頁。

(26) 「休息万命」について『嬉遊笑覧』は、「今は児女など、くさめをすれば万歳（まんざい）といひ、下賤はくそをくらへといへり。休息万命のひびきに似たるもおかし」と記す。山内『もののけ』は、これをクシャミの語源の別説として、次のように紹介している。

現在でも奄美から沖縄諸島にかけて、くさめをすると「糞食え（クソクエー）」といい、一度で止まらないと「小便食え（シークエー）」という風習が残っている。お伽草子『百物語』にも鼻ひったら「糞食へと申しける」とあったから、江戸時代にはこの悪罵が本土にもあったらしい。誰かが私の魂をぬきとり、生命を縮めようと呪詛したので鼻がむずむずした。そこで不明の相手に汚い言葉で罵詈雑言を浴びせかけ、呪詛返しの対抗措置をとったのだろう。しかしこの「糞食え」は「休息」の訛った形かもしれない。というのも奈良朝頃まで、鼻ひりは恋人間の魂の交流や恋人の訪れる先触れと考えられ、むしろ吉兆とされていたからである。『万葉集』の次の歌はそのことをよく示している。

今日なれば鼻ひ鼻ひし眉（まよ）かゆみ思ひしことは君にしありけり

（二八〇九）

『万葉集』のこの歌からは、『詩経』の「終風」が思い起こされて興味深いが、「糞食え」の呪文に話を戻すと、愛知三河の出身である筆者の子供の頃、クシャミの後に「糞を食らえ（クソークラエ）」と唱える御老体は確かに居られたと記憶する。昭和の戦後になっても、この習俗は残っていた訳である。ただ、「小便…」については知らない。

【追記】

脱稿後、相田洋『中国中世の民衆文化　呪術・規範・反乱』（中国書店、一九九四年）所収の「キョンシー・ノート」に、クシャミの俗信について触れた一節があることを知った（三五～三六頁）。拙稿執筆時には気付かず取り上げられなかった資料（元・無名氏『居家必用事類』、元・康退之『梁山泊黒旋風負荊雑劇』など）についての言及がある。併せて参照されたい。なお、『居家必用事類』所引の『百怪断経』は、『事林広記』の『占噴嚏経』と同文であり、『説郛』とは異なる。

（おかだ・みつひろ／横浜国立大学名誉教授）